



文化遺産特別演習 報告書

第5号



備瀬のフクギ並木にて

北海学園大学人文学部



文化遺産特別演習 報告書

第5号

目次

令和7年度 文化遺産特別演習 報告 引率教員 郡司 淳・佐藤 貴史……………	10
沖縄戦と学徒隊の思い 清水 広大……………	12
沖縄戦と平和教育 —戦争遺跡から考える— 千田 朝陽……………	16
沖縄本島におけるグスク及び御嶽とは何か —琉球開闢の九御嶽と、ほかグスク・御嶽から考える— 立花 花恵……………	19
沖縄の戦争と観光体験 —学びと娯楽の視点から— 渡部 紗菜……………	29
北海道と沖縄戦 鎌倉 桃華……………	34



着きました！@那覇空港



那覇空港



札幌～ 今帰仁村～本部町



ガイドさんの説明を聞く1@今帰仁城跡



今帰仁城跡1



ガイドさんの説明を聞く2@今帰仁城跡



今帰仁城跡2



今帰仁城跡3



フクギ並木道を歩く後ろ姿



備瀬のフクギ並木



フクギの実



猫と沖縄の海



本部町～
名護市～読谷村～
嘉手納町



ウミガメ



マナティー



下から見るエイとジンベエザメ



美ら海水族館1



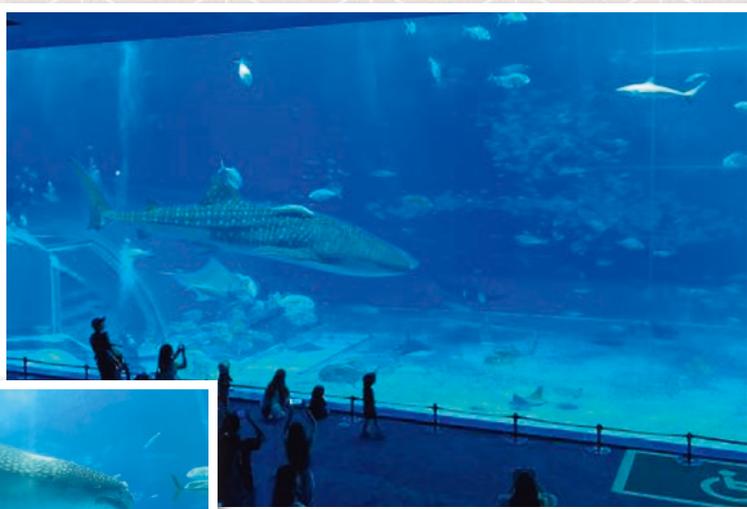
美ら海水族館2



美ら海水族館5



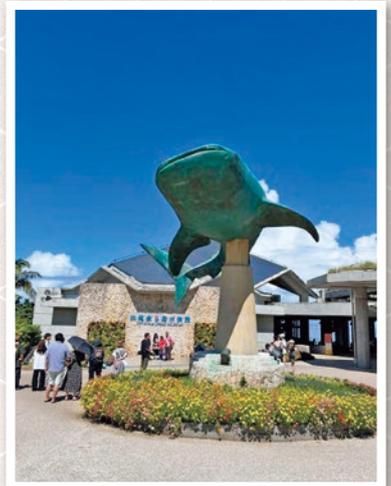
美ら海水族館4



美ら海水族館6



美ら海水族館3



美ら海水族館7



龍の浜(海洋博公園)



座喜味城跡2



座喜味城跡1



座喜味城跡3



御殿



座喜味城跡4



沖縄そばとジューシー



ガイドさんの説明を聞く@チビチリガマ



ユンタンザミュージアム



スコールとバナナ



うるま市～中城村～
宜野湾市～浦添市



勝連城跡3



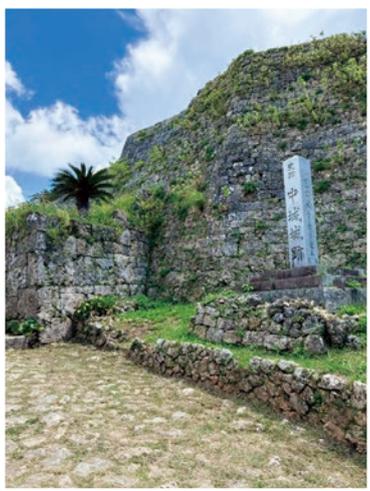
勝連城跡2



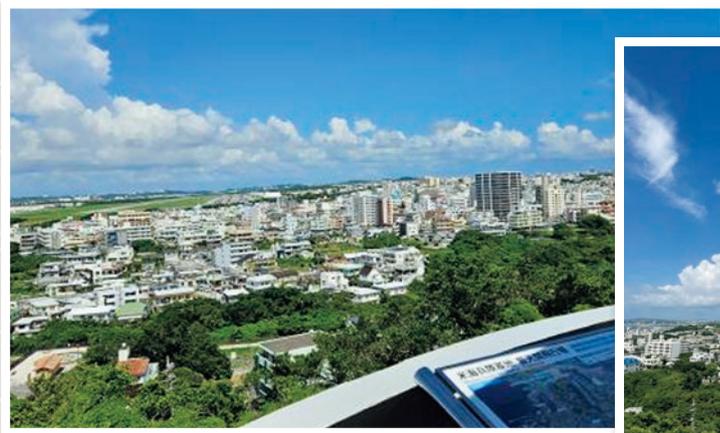
勝連城跡1



勝連城跡から見た景色



中城城跡



嘉数高台公園



嘉数高台公園から見た普天間基地



中城城跡アーチ門前



浦添城跡1



浦添城跡2



平和祈念公園1



平和祈念公園3



平和祈念公園2



ひめゆりの塔



斎場御嶽



辻雄二先生(琉球大学)の説明を聞く@斎場御嶽



ニライ・カナイ橋



ここでバスのガイドさんと運転手さんとはお別れ



糸満市～八重瀬町～ 南城市



那覇市～自主研修



首里城1



首里城2



NAHAモニュメント



修復中の首里城



玉陵



BLUE SEAL本店



沖縄の海



辻雄二先生(琉球大学)の説明を聞く@首里城



知念城跡



アメリカンビレッジ



沖縄県立博物館1



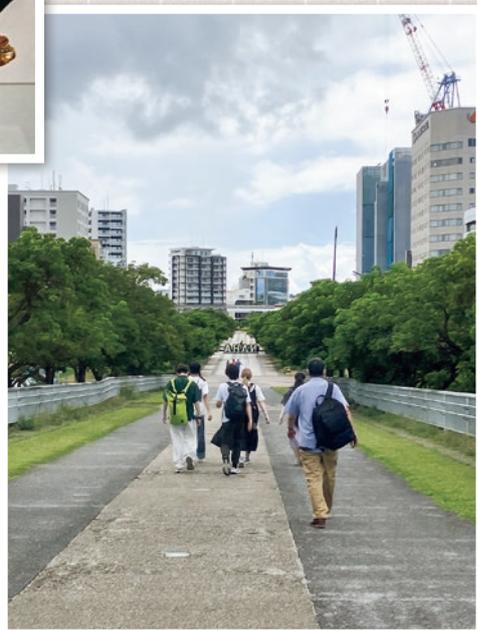
沖縄県立博物館2



那覇市～札幌



上空からの景色



いよいよ札幌に帰ります



無事到着！@新千歳空港

令和7年度 文化遺産特別演習 報告

引率教員 郡司 淳・佐藤 貴史

文化遺産特別演習は、日本各地にある世界遺産とその周辺において研修を行い、「歩く、見る、聞く」学修を通し、日本文化とその世界的な意義についての理解を深めるため、2019年度に開講された科目です。2020・21年度には新型コロナウイルスの流行を受けて中止を余儀なくされましたが、19年度に広島、22年度に東北、23年度に九州北部（平戸・長崎）、24年度に関東（とくに北部）を研修先として実施してきました。開講当初計画された研修先は、今年度の沖縄研修によって一巡したことになります。

沖縄は、日本の弥生時代以降、北海道とともに独自の文化を育み、12世紀以降、琉球王国のもとで交易・海洋国家として栄えました。その沖縄には、琉球処分による日本編入、沖縄戦、アメリカによる占領統治、本土復帰を経て現在、在日米軍基地の総面積の70%が集中しています。受講生には、そのような沖縄の過去と現在をふまえ、「沖縄からみた日本」について現地調査をとおして考えてほしいと念じていました。

そのため調査対象の選定にあたっては、沖縄県の世界遺産である「琉球王国のグスク及び関連遺産群」を中心に据えつつ、沖縄戦関連施設・戦争遺跡（沖縄県営平和祈念公園、ひめゆりの塔、各地のガマなど）や、沖縄の現在がわかる施設（嘉手納・普天間基地、牧志公設市場など）にも目を配りました。5泊6日の旅程は、次の通りで、沖縄本島を北部（国頭）から中部（中頭）を経て南部（島尻）へ縦断するようなコースをとりました。

- 9月8日（月） 新千歳空港発に集合、同空港を出発して那覇空港着。那覇市から今帰仁村に移動、今帰仁城跡・今帰仁村歴史文化センターを巡見後、本部町に移動、備瀬のフクギ並木を散策し、本部町泊
- 9月9日（火） 海洋博公園（国営沖縄記念公園）において美ら海水族館・おきなわ郷土村・海洋文化館などを巡見後、本部町から名護市を経て読谷村に移動、座喜味城、ユンタンザミュージアム、沖縄戦で波平地区住民の避難壕として使用され、集団自決が行われたチビチリガマ、同じく避難壕として使用されたシムクガマを巡見、さらに道の駅かでな（嘉手納町）において嘉手納基地を眺望し、那覇泊
- 9月10日（水） 那覇市を発ち、勝連城跡・あまわりパーク（うるま市）・中城城跡（中城村・北中城村）を巡見後、かつて沖縄戦の激戦地でもあった嘉数高台公園（宜野湾市）において普天間基地を眺望、さらに浦添大公園内の浦添城跡（浦添市）を見学して那覇市に戻り、牧志公設市場を見学し、那覇泊
- 9月11日（木） 那覇市を発ち、ひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館・南北之塔・沖縄県営平和祈念公園（平和の礎、国立沖縄戦没者墓苑、各都道府県慰霊塔・碑、

- 沖縄平和祈念資料館など／糸満市）を巡見後、沖縄戦で第24師団第1野戦病院新城分院が置かれたヌヌマチガマ（八重瀬町）において入壕体験を行い、さらに斎条御嶽（南城市）を見学し、那覇泊
- 9月12日（金） 那覇市内において龍潭・守礼門・園比屋武御嶽石門・修復中の首里城（首里城公園）・玉陵を巡見後、自主研修に入り、対馬丸記念館（那覇市）、知念城跡友利之嶽（南城市）、エイサー会館（沖縄市）、アメリカンビレッジ（北谷町）などをそれぞれ見学し、那覇泊
- 9月13日（土） 那覇市内において沖縄県立博物館を見学後、那覇空港に移動。同空港を出発して新千歳空港着、解散

受講生は、鎌倉桃華・清水広大・立花花恵・千田朝陽・渡部紗菜の各氏で、英米文化学科4年生である鎌倉氏を除き、いずれも日本文化学科の1年生でした。学生諸氏は、4月から7月にかけて自らの興味関心にしたがい、4回の事前学修を経てテーマを設定し、研修に臨みました。沖縄では、強い日差しと過密なスケジュールにめげることなく、時間を厳守して安全配慮を怠らず、それぞれ真摯に課題に取り組みました。さらに9月と10月の2回の事後学修では調査報告を行い、教員との質疑応答をふまえてレポートを完成させました。

本報告書に収められたレポートは、グスク・御嶽の存在形態を解明しようとした立花氏の興味深い論考を別とすれば、ひめゆり学徒隊（清水氏）、ダークツーリズムにおける平和教育の可能性（千田氏）、戦争の記憶の継承と観光の関係（渡部氏）、沖縄戦・戦没者慰霊をめぐる北海道との結びつき（鎌倉氏）といったように視点こそ多岐にわたるとはいえ、沖縄戦にテーマが集中しています。その内容は、初學者ゆえの拙さも残るとはいえ、gamma見学・入壕体験やひめゆり平和祈念資料館の展示見学で受けた衝撃をふまえつつ、若者らしいひたむきさでそれぞれの課題に挑んだ成果として誇るに足るものです。学生諸氏には、本研修の成果を足場として、今後さらに大学において、社会において、自らの学びを深めていってほしいと願ってやみません。

最後になりましたが、謝辞を述べます。文化人類学・民俗学がご専門の琉球大学教育学部教授である辻雄二先生には、大変お世話になりました。先生は、旅程の検討段階から加わって計画を練ってくださるとともに、6日間の研修中、私たちに同行して現地における説明やボランティア・ガイドの手配、自主研修の引率などにあたってくださいました。本研修が実り多きものとなったのは、偏に先生のご尽力の賜です。先生にはいくら感謝しても感謝しきれません。

本研修が快適に旅となったのは、株式会社ブルーツーリズム北海道（クオリティツアーズ）の浦口宏之氏、琉球バス交通のドライバーである小林優氏とガイドの玉城翼氏に負うところ大でした。北海学園大学法学部の卒業生でもある浦口氏には、学生の経済的負担に配慮した旅行プランを提供していただくとともに、宿泊先や貸切バスの手配など旅行全般をコーディネートしていただきました。また、琉球バス交通のお二人は、当初の予定から一部旅程を変更したのにもかかわらず、快く応じてくださり、さらに現地の下見までして安全確保に力を尽くしてくださいました。三氏のご厚情に対し、心より御礼申し上げます。

沖縄戦と学徒隊の思い

1部日本文化学科 1年 清水 広大

はじめに

今回私は、「文化遺産特別演習」という課外学習に参加し、沖縄の地に訪れた。現地に赴き、多くの体験を味わったことで得られた知識と知見は、この研修をかけたがえのないものとした。実際に戦跡などを巡り、沖縄の歴史的な背景や文化的な側面も捉えることで、北海道とはまた別の、沖縄独自の伝統を知ることも出来た。

私が設定したテーマは「沖縄戦」についてだ。特にひめゆり学徒隊にフォーカスした内容でまとめる。戦争という負の歴史を扱うため、戦跡を巡る際にも、若干の動揺を感じていた。ダークツーリズムが目的であるため、仕方がないことではある。私自身、戦争を経験した世代ではないため、当事者との価値観のズレなども生じてしまう。しかし、過去の凄惨な現実から目を逸らし続けることは、それこそ沖縄の地に対する冒瀆なのではないか、私は実際にそう感じた。学徒隊について取り上げることで、彼女らが沖縄戦で何を経験したのか、この貴重な歴史的事実を知ること、戦争という存在に対して自分の見解を述べる事が出来るはずだ。

1. ひめゆり学徒隊

ひめゆり学徒隊とは、1945（昭和20）年3月、米軍の沖縄上陸をひかえ、軍の看護要員として、沖縄師範学校女子部と沖縄県立第1高等女学校の生徒によって編成された女子学徒隊の通称である。それが組織されたのは、1944年12月、米軍上陸必至とみた軍・県当局は、中等学校生徒と戦力化する方針を立てたことによる。ちなみに「ひめゆり」の名は、沖縄師範学校女子部の前身である沖縄県立師範学校が第1高女の校地に移転した際、両校の広報誌である『乙姫』（第1高女）、『白百合』（女子師範）を併せて『姫百合』としたことに由来するという説が有力だ。

1942年4月に沖縄師範学校女子部に入学した山内祐子さんによれば、当時の彼女たちは穏やかで、平凡な学生生活を送っていた。しかし、3年生に進級した44年になると、軍歌を歌わされたり、セーラー服からヘチマ襟に変わったりと、国民が戦場に動員される準備は整えられていった。更には、いつ米兵と戦闘状態になっても良いように、約七十キロもの距離を歩き丈夫な体づくりを目指す「十七里行軍」という行事も強行された。

1945年の3月から4月にかけて、米軍の爆撃が更に勢いを増し、師範と高女の生徒たちに対して、両校の校長を兼任する西岡一義から南風原陸軍病院への動員命令が下された。実際に動員されたのは、学徒222名、引率教師18名である。彼女らは看護婦として傷病兵の手当や治療、更にはまだ完成し切れていない壕の堀作業など、あまりにも重労働と言わざるを得ない過酷な仕事を任された。その中でも特に大変と言われているのが「飯上げ」だ。自分の腰くらいの高さの樽を、丘を越えた先にある炊事場まで持って行く。明らかに女子学生がすべき仕

事では無いはずなのに。そして米軍が上陸し、すべての傷病兵たちが未完成の壕に収容された。しかし壕の中での生活は、我々が想像するより遥かに悲惨なものであった。

2. 地獄と化した病院壕（ガマ）

私たちは研修旅行の際に、ガマと呼ばれる壕跡地を3か所見学した。それぞれ順を追って紹介する。まずは、2日目に訪れたチビチリガマとシムクガマについて。この2つの自然壕は読谷村に存在し、どちらも米兵の魔の手から逃れるために避難したとされるガマである。当時、日本の敵国であるアメリカとイギリスに対して、「鬼畜米英」と呼んでいた。特にチビチリガマでは、米兵からの残虐な攻撃を恐れ、ガマから出

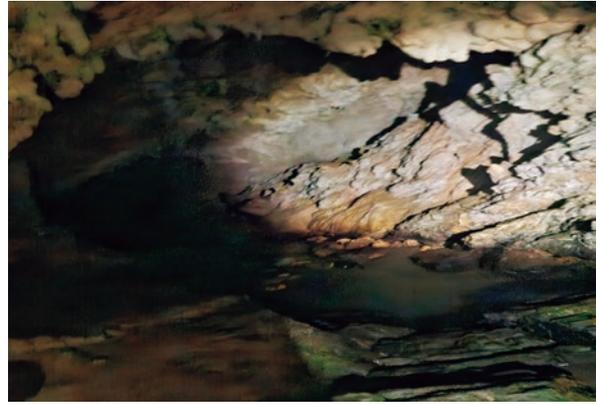


図1 シムクガマ内部

ることを拒んでいた者が多かった。更には、肉親が互いに殺しあうといった「集団自決」が行われた場所でもある。正に地獄絵図そのものだ。外に出た人が何人かいたが、米兵は一切危害を加えなかったという。対するシムクガマは、ハワイからの帰国者である比嘉平治氏と比嘉平三氏（いずれも故人）の二人が、「アメリカ人は私たちが殺さない」と、避難民に対し必死に説得したことで知られる。この二人のお陰で、殺されずに生き延びた人がいたことを忘れてはいけない。

次に、4日目に訪れたヌヌマチガマについて。このガマは、実際に内部を見学したため、特に印象に残っている。第24師団第1野戦病院の分院として機能しており、傷病兵の治療や手術だけでなく、排泄物の処理、手足の切断などの作業も行われた。しかし、患者が段々と増えていき、寝台も足りなくなると、薬や麻酔剤も行き届かないといった状況になり、学徒隊の生徒は休む暇も無いまま、一晩中兵士の看護をし続けた。南風原の病院壕の様子と瓜二つである。壕の中は、傷病兵の血や尿便の臭いで蔓延しており、患部に蛆がわき蠅がたかり、不衛生極まりない状態になっていたという。私が最も衝撃であったのは、内部があまりにも暗かったことだ。少し奥に行けば途端に光が消え失せる。あのような環境下では、誰もが平静を保てず、適切な医療など施すことも出来なかった。

3. ひめゆりの解散と沖縄戦の終結

5月下旬には南風原壕付近まで米軍の攻撃が届くようになり、日本軍が首里での決戦か、それとも本島南部へ撤退して持久戦まで持っていくかの二択を迫られ、後者の道が選ばれた。陸軍病院にいた生徒たちも同様に南部への撤退を命じられた。前出の山内さんによれば、衛生兵は重症患者に対し、「後で助けに行く」と嘘をつき、彼らを壕に残してその場を去った。動けない兵隊たちには、青酸カリを含んだミルクなどを配り、クレゾールという消毒液を心臓に打ち込んだそうだ。その結果、多くの人が命を落とした。

山内さんの証言によると、南部までの道は泥沼と化し、歩くのも精一杯であったという。砲弾の雨が降り注ぎ、必ず誰かがそれに直撃して死んでいく。ぬかるみに足をとられても、山内さんたちは歩き続けた。そしてようやく、南部の糸洲（現糸満市域）に着いたのだ。南風原病院から約15キロ離れた場所にある糸洲では、まだ戦争の被害があまり無く、綺麗な泉が湧いていたため、彼女たちはそこで髪や体を洗った。

現糸満市域にはガマが約240カ所存在し、住民や避難民によって避難壕として利用された。しかし、衛生兵は自分たちの避難場所を確保するために人々を追い出したという。陸軍病院も6つのガマに分かれていた。ただでさえ、南風原で薬品を使い果たし医療器具も負傷兵を寝かせる場所もなかったため、まともな治療が出来るはずもなかった。

6月18日、米軍は山内さんたちが避難していた波平の壕付近まで来ており、爆弾などを投げこんで壕の中にいる人を殺し、あぶりだす「馬乗り攻撃」を仕掛けた。ついに日本軍は抵抗できなくなり、この日、学徒隊に「解散命令」を告げる。完全に軍から見捨てられ、この先どうするかを自分たちで考えなければならない。しかし迷っている暇は無い。ひとまず師範の国語教師であった仲宗根政善氏（故人）に引率され、山内さん生徒12人は、海岸線に沿うように逃げ、沖縄本島最南端の「喜屋武岬」に辿り着く。軍という後ろ盾を失い、やむを得ず、「アダン」と呼ばれる果樹の林に身を潜んでいた。

6月23日、彼女らは捕虜になった。しかし、ひめゆり学徒隊の戦没者全体136名の86%にあたる117人は、6月18日の解散命令後に死亡、または行方不明になっている。解散命令は、米軍の包囲網に生徒らを放り出すことで、その犠牲を飛躍的に増やしたといえる。山内さんらの例は、きわめて稀なケースであったのだ。

山内さんらが捕虜となった同じ日、牛島満第32軍司令官や長勇参謀長が自決をしたことで、沖縄で組織的戦闘が終わった。しかし、軍司令部の最後の電報が軍民に対して徹底抗戦を命じるものであったため、その後も終戦直後まで散発的な戦闘が続き、多くの犠牲者が出たのだ。

おわりに

研修の4日目に「ひめゆり平和祈念資料館」を訪れた際、多くの沖縄戦に関する展示物を見学した。そのどれもが、学徒隊の生き様を象徴しているかのように見えた。外に展示されていた「ひめゆりの塔」をこの目で見たときは、様々な感情が入り乱れた。国のために死んでいった者たち、一人一人の魂がこの塔に眠っている。軍国少女として戦ってきた彼女らの苦悩。この思いを肌で感じる事が出来た。学徒隊が沖縄戦で経験したことは、決して戦争の美談でも何でも無く、「戦争がいかに無垢な命を巻き込み、破壊するのか。」という批判的な見方ができ



図2 ひめゆりの塔の記

る貴重な資料そのものだ。戦争などという惨く、愚かなものは必ず無くすべきだ。綺麗事だとしても構わない。私自身、今回の研修を通して、改めてこの解釈に辿り着いた。ひめゆりの思い、人間の命の尊さ、これらを後世に伝えていくことが、私たちが沖縄戦を語る上で最も重要なことであり、平和教育の真の目的なのではないか、私はそう捉えた。今後も、ひめゆりの塔をはじめとする多くの戦跡や慰霊施設が、悲惨な歴史を語り継ぐ「生きた教材」として沖縄の地に残り続けてほしい。また、私たちも沖縄戦を学ぶ一人の人間として、その歴史の重みと向き合いながら、同じ過ちを繰り返さないための責任を果たしていく必要があるのだ。

[参考文献]

- ・ひめゆり平和祈念資料館編『沖縄戦の全学徒隊』ひめゆり平和祈念資料館資料集 4、ひめゆり平和祈念資料館、2020年
- ・渡辺考『ひめゆり学徒隊だった山内祐子さんが沖縄の高校生に伝えたこと』講談社、2025年
- ・中山良彦『ひめゆり平和祈念資料館公式ガイドブック』沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会、1989年

沖縄戦と平和教育

—戦争遺跡から考える—

1 部日本文化学科 1 年 千田 朝陽

はじめに

私は文化遺産特別演習を履修し、2025 年 9 月 8 日から 9 月 13 日まで 5 泊 6 日の日程で沖縄県を訪れた。

私が本研修にあたって事前に設定したテーマは「沖縄戦と平和教育」についてだった。このテーマに決めた理由として、修学旅行における平和学習が沖縄観光の主な目的の一つであることが挙げられる。実際、2023 年に日本修学旅行協会が行った調査によれば、高等学校の修学旅行の行先として沖縄県が 1 位になった。日本の学校にとっても、沖縄県は平和学習・異文化学習を行うにあたって活用できる場所とされていることが読み取れる。過去の戦争や災害といった暗い記憶を次世代へ継承するための観光を「ダークツーリズム」と呼ぶ。高校生を相手に修学旅行において平和教育を展開することは、彼らの平和への意識を醸成する貴重な機会と言えるだろう。

私はこの「沖縄戦と平和教育」というテーマに沿い、沖縄戦の遺跡を見学すべく研修旅行に臨んだ。

1. 読谷村—チビチリガマとシムクガマ—

本研修旅行の行程 2 日目に当たる 9 月 9 日、我々は沖縄本島中部・読谷村にあるチビチリガマとシムクガマを訪れた。「ガマ」とは沖縄方言で自然の洞窟のことであり、沖縄戦中は民間人の避難場所や傷病軍人の治療場所として沖縄本島のあらゆるガマが使われた。そのうちの 2 つがチビチリガマとシムクガマであり、これらは民間人の避難場所として使われた。今回、我々は知花昌太郎氏によるガイドの下、講話を受ける形で見学した。

1945 年 4 月 1 日、同年 3 月 26 日から 27 日にかけて慶良間諸島に上陸していたアメリカ軍は、沖縄本島へ上陸し、読谷村から嘉手納町、北谷町へと進軍した。そのうち読谷村の波平集落では、住民がチビチリガマとシムクガマの 2 つのガマへ避難した。

チビチリガマでは、満州から引き揚げてきた元従軍看護婦や元日本軍兵士の避難民が「鬼畜米兵」を唱え、ガマを出れば米兵に殺される、と他の避難民に説いた。後にガマから出た住民もいたが、彼らは決して生き延びるために出たのではなく、もういっそ殺されようという覚悟でガマを出たのである。一度は集団自決が試みられるものの一部の避難民により中止させられた。しかし上地春さんという当時 18 歳の少女が、米兵に殺されるくらいなら母親に殺された方がいいと、母に自分を殺すように強く要求し、上地さんは母によって手にかけられた。

チビチリガマに避難していた住民は、「鬼畜米兵」という「米兵は鬼であり、女子供をも凄

惨に殺害する」という軍国主義的なプロパガンダに囚われていた。また当時の沖縄では皇民化教育が行われており、敵に投降することは恥だとされ、最後の1人まで戦い抜くことが美德とされていた。この母娘の例を見ると、母は、娘が「投降して米兵に殺されるのであれば、屈辱的な死を遂げることになる。それは日本人として最も恥ずるべきことだ。ならば、母親に殺される方がいい」と考え、娘の尊厳を守るべく親子心中に至ったのであろう。

一方、約1000名の住民が避難していたシムクガマでは、ハワイからの帰国民である比嘉平治氏とその叔父である比嘉平三氏（いずれも故人）が、チビチリガマと同じく「鬼畜米兵」と考えていた他の避難民に対し、「アメリカ人は人を殺さないよ」と説得した。米兵がシムクガマにやってきて投降するように求めてきた際には、平治氏と平三氏が抵抗しようとする者を諫め、英語で米兵と交渉し、最終的に約1000名の命は助かった。平治氏と平三氏の実際にアメリカで暮らしていた経験が、結果として大勢の命を助けることとなったのである。

しかし、それは集落内での明暗を分けたということである。戦後、この2つのガマでの出来事は、村民にとってガマの存在とともにタブーとなり、住民の間にはわだかまりが生まれた。しかし終戦から38年後の1983年、ようやく住民たちにチビチリガマとシムクガマで起こったことを集落内で共有できるような雰囲気ができ始めた。知花氏はこのことを「戦争は終戦後38年間経っても終わっていなかった」とする。2つのガマにおける異なる戦争体験が、住民にある種の気まずさを生み出したと言えるだろう。

2. 女子学徒隊

4日目に当たる9月11日、我々は沖縄本島南部にある伊原第3外科壕、ひめゆりの塔、沖縄県営平和祈念公園、南北之塔、ヌヌマチガマを見学した。

「ひめゆり学徒隊」として知られる女子学徒隊は、沖縄師範学校女子部と県立第1高等女学校の生徒たちで編成され、引率教員たちとともに沖縄陸軍病院に配属された。また、「白梅学徒隊」と呼ばれる県立第2高等女学校の生徒で編成された女子学徒隊は、第24師団第1野戦病院に配属された。この第24師団は兵士の多くが北海道出身者で構成されていた。彼女らは砲弾が降る中でも、負傷兵の治療から世話、兵士の飲食に関わる業務や遺体の処理まで、過酷な任務を遂行していた。

次第に日本軍陸軍第32軍が本島南部に撤退し始め、それに伴い米軍の攻撃が南部に集中し始めた。日本軍は6月18日、ひめゆり学徒隊の解散を命令する。林博史『沖縄戦』によれば、それ以降、ひめゆり学徒の死者の内80.6%が亡くなっている。解散後に多くの生徒が死亡した理由は、彼女らは行く当てもなく戦場を彷徨いながら攻撃に巻き込まれたためだ。引率教員や軍人らは解散時、彼女らに生きようと伝えたが、呼びかけもむなしく、多くの生徒が命を落とすこととなった。



図1 ひめゆりの塔の記

ひめゆりの塔の資料館には、修学旅行生と思われる団体もみられた。また道中もバスガイドの方が詳しくひめゆり学徒隊のことを解説なさっており、ひめゆりの塔の修学旅行需要が高いことがうかがえた。

3. ヌヌマチガマ

沖縄県営平和祈念公園の見学後、八重瀬町にある南北之塔とヌヌマチガマを見学した。

南北之塔には、第24師団に所属していた兵士のうち、アイヌ兵の遺骨が納められている。

ヌヌマチガマは陸軍第24師団第1野戦病院新城分院として利用されていた。今回我々はガイドの方の下、内部に立ち入らせていただいた。内部では実際に病床や手術室、処置室として使われていた場所を見学した。

内部にて、ガイドの方から一度照明を落として内部の音を聞いてみようという提案があった。そうして我々は何も見えない中音だけを聞いてみたのだが、私はこれが当時だったらどんな音が聞こえていたのだろうと想像しながら時を過ごしたが、呻き声や叫ぶ声が聞こえた思いがした。大勢の傷病軍人が蛆やマラリアの脅威にさらされ治療を待っていたのだから、おそらくガマ内の衛生環境は最悪である。想像するだけで過酷な環境が、その場にはあった。

おわりに

沖縄戦の遺構が伝えるメッセージを読み取れば、今我々が平和に生きていることが当たり前ではないことを痛感させられる。

日本は太平洋戦争の終戦から今年で80年が経過した。80年間、日本はどの国とも戦争をしておらず、主権が脅かされることもない状況が続いている。今生きている日本国民はほとんどが戦争を経験していないか、していても幼少期の出来事なのだ。日本国民はどこか平和に慣れすぎてしまったところがあるだろう。だが、今もウクライナやガザで争いが起きているように、平和は決して人類が当たり前で得られるものではない。戦争の記憶は絶対に風化させてはならず、未来に継承すべきだ。それを未来ある中高生に伝えられる手段の一つが、平和教育なのだ。

[参考文献]

- ・林博史『沖縄戦 なぜ20万人が犠牲になったのか』集英社、2025年
- ・ベネッセ総合教育研究所「令和の修学旅行、「体験重視」でどう変わった？ 定番スポットのプログラムも進化 新たな課題も」2024年11月19日
https://benesse.jp/kyouiku_trends/202411/20241119-1.htm (2025年10月14日確認)
- ・金城実・知花昌一・高橋舞「〈コロキウム1〉「継承」の場が、より以上の記憶空間になる可能性―「集団自決」の記憶を遺すチビチリガマの継承実践から―」『近代教育フォーラム』28巻、2019年9月、127-135頁
- ・読谷村観光協会「チビチリガマ・シムクガマ」
<https://www.yomitan-kankou.jp/tourist/watch/1611319972/> (2025年10月15日確認)

沖縄本島におけるグスク及び御嶽とは何か

—琉球開闢の九御嶽と、ほかグスク・御嶽から考える—

2部日本文化学科 1年 立花 花恵

はじめに

私が今回の文化遺産特別演習において掲げたテーマは「沖縄におけるグスク及び御嶽とは何か—琉球開闢の九御嶽と、ほかグスク・御嶽から考える—」である。

グスクは、1983年に沖縄県教育委員会で実施されたグスク分布調査では、沖縄本島とその周辺離島で総数223件と確認され（『ぐすく—グスク分布調査（I）』）、非常に多いことがわかる。また一般的に「城」という漢字があてられ、文字通り城・城塞の意味を持つ。2000年12月に琉球王国のグスク及び関連遺産群が世界遺産として登録されたが、その一つの中城城跡も「ナカグスクジョウアト」と同じ城という漢字が連続であるが読みが異なるのは有名だろう。

では同じく琉球王国のグスク及び関連遺産群に登録されている斎場御嶽の御嶽とは何か。御嶽は聖地・聖域のことを指し、グスクのように城塞的役割は基本的にない。しかし、グスクや御嶽には元を辿ればそこは古代祖先の墓所が拝所となり、やがて村や集落の祖霊神として祀られた。つまり、グスクと御嶽の核となるものは多くの人々から信仰・崇拝されてきた聖地であり、この二つの本質は同じものとして解釈できる。グスクは集落である説があるが、それは墓所や拝所は集落の付近に所在するためこのような説が生まれたと考えられる。そして時代が流れるにつれて徐々にグスクは城塞的役割をもつようになり、現在のグスクと御嶽の在り方に变化した。

御嶽には琉球の神話伝説もあり、上記で紹介した斎場御嶽は琉球開闢の御嶽という神話に登場する琉球創造神の阿摩美久が創ったといわれる琉球最高の聖地でもある。琉球開闢の御嶽は、ニライ・カナイと呼ばれる沖縄の人々が思い描いた海の遥か彼方にある理想郷（神の世界）から君臨した阿摩美久が、いくつかの御嶽をつくったとされている。本演習では、羽地朝秀による琉球国の初の正史『中山世鑑』（1650年）で記述されている琉球開闢の九御嶽（以下「九御嶽」という）に注目していきたいと思っている。九御嶽は以下の通りである。

1. 安須森御嶽
2. 今帰仁城の上之嶽
3. 知念城の友利之嶽
4. 斎場御嶽
5. 藪薩御嶽
6. 玉城城の雨粒天次御嶽
7. 久高島のクボー御嶽

8. 首里城の首里森御嶽
9. 首里城の真玉城嶽

また、九御嶽と本演習の調査地でもある座喜味城、中城城、勝連城を地図上に記すと図1のようになるが私はここで疑問が生じた。それは、首里城の首里森御嶽と真玉城嶽以外の7つの御嶽と座喜味城、中城城、勝連城が沖縄本島の沿岸部に分布している点と、これら12のグスク及び御嶽が本島南部に分布している点である。これらの共通点に理由があるのか、九御嶽とほかのグスクで何か関わりがあるのか。この二つの疑問を解決するため、今回の研修旅行では安須森御嶽、真玉城嶽、クボ御嶽を除く九御嶽と3つのグスクを訪れることにした。



図1 琉球開闢の九御嶽と座喜味城、中城城、勝連城の位置

1. 調査結果第1日目

1-1. 今帰仁城跡テンチジアマチジ（城内上之御嶽）、ソイツギ（城内下之御嶽）

最初に訪れたのは今帰仁城跡だ。13世紀ごろに築城された今帰仁城は琉球王国のグスク及び関連遺産群の一つであり、九御嶽の一つでもある。14世紀頃に沖縄本島が北部を北山、中部を中山、南部を南山とそれぞれ有力な按司が支配した「三山時代」に、北山王が拠点としていた場所だった。その後中山の尚巴志に敗れ、中山によって監守として今帰仁グスクが設置されたが、1609年の薩摩軍による侵攻で城は燃え、人が住まなくなってしまった。以後の今帰仁城は、拝所として人々の心の拠り所になり、参拝者が今日でも多く訪れている。『中山世鑑』の成立は17世紀中期なため、成立する頃には既に城塞的役割よりも拝所としての役割のほうが強かったことがわかった。

入り口ではまず平郎門という石門を潜り、沖縄の桜で有名なカンヒザクラが左右に立ち並ぶ長い石の階段を上った。そして広場にある歌碑の左奥を進むと低い石垣の中心にやや低い木が立っているソイツギ（城内下之御嶽）があった（図2）。この御嶽は九御嶽にはないが、『琉球国由来記』（1713年）に記されている御嶽である。そして、さらに奥に進むと御内原という城内の女官が住んでいた場所に出たが、海と町が見渡せられ、今帰仁城の当時の権力の強さがうかがえた。御内原の南東側に行くとソイツギに似た低い石垣の中央に木が立っているテンチ



図2 ソイツギ(城内下之御嶽)



図3 テンチジアマチジ(城内上之御嶽)

ジアマチジ（城内上之御嶽）があった（図3）。テンチジアマチジは今帰仁城の中で最も神聖な場所で、かつては靈石があり北山の守護神として存在していた話も知ることができた。説明板によると、ソイツギは祭祀の際にテンチジアマチジと共に祭祀場として拝まれており、この二つの御嶽は漢字でもわかるように繋がりが強い御嶽だったことがわかった。

今帰仁城跡にはクバの御嶽という御嶽もあるのだが、残念ながら時間の都合上見学することができなかった。クバの御嶽は『聞得大君御殿並御城御規式之御次第』（1875年）に記述されている琉球開闢の七御嶽（以下「七御嶽」という）のうちの一つである。

沖縄では火の神という火を司り、家庭の台所に祀られる神もまた有名であるのだが、今帰仁城にも祠が建てられていた（図4）。説明板によると、この祠は第二尚氏時代の北山監守一族の火の神が祀られており、中には香炉と火の神を象徴する石が置かれている。

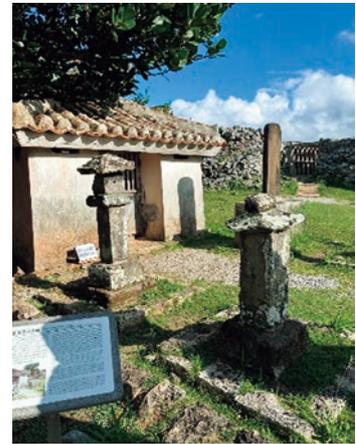


図4 今帰仁里主火の神

2. 第2日目

2-1. 座喜味城跡

2日目に訪れたのは世界遺産の一つである座喜味城跡だ。座喜味城は築城家で有名な読谷村の豪族である按司護佐丸によって1420年頃に築かれた。規模としては中規模だが、他のグスクには見られないくさび石を用いた門やいくつもの曲線でできている城壁、石材や積み方含め先進的な建築技術で築かれているのが座喜味城の評価を上げている点の一つだろう。

城は一の郭と二の郭で構成されており、入り口は二の郭の石造アーチ門から中に入った。また、元々城の拝所は4か所あったが、現在はこの二の郭のアーチ門前に場所が移っているため実質的にはアーチ門が拝所となっている（図5）。中に入ると正面に一の郭に進む階段とアーチ門とあり、そこも進むと右手に建物の跡がある広がった場所に出た。一の郭から城の一番高い城壁に上ることができたので上ってみると、城が丘陵地に立地しているため360度ほぼ全域を見渡せるほどの絶景があった。南を見るとわずかに那覇市が見えたり西には海も見えたりしたため城の大きさに限らない当時の護佐丸の権力の強さを感じることができた。



図5 座喜味城の二の郭アーチ門前

3. 第3日目

3-1. 勝連城跡

3日目の始めに訪れたのは沖縄本島中部に位置する勝連城だ。勝連城も琉球王国のグスク及び関連遺産群の一つで按司だった阿麻和利が治めていた五つの曲輪からなっている大規模な城

である。13世紀前後に築城された城は東西に細長く、高さは座喜味城より標高の低い丘に立地しているが、体感では勝連城のほうが急こう配に感じた。だが、実際に上ってみると階段を何回か上った程度で頂上に着いたため非常に不思議な感覚だった。徒歩で上り始めたのは四の曲輪からで、この曲輪は勝連城で最も低い位置にあり、案内して下さったガイドさんによると、カーという意味の井戸が全部で五つあり、水が貴重だった当時はこの井戸がいかに勝連城を発展させたかわかるものであった。

城内には拝所が10か所もあり、その中で訪れることができたのは三の曲輪の肝高の御嶽と、二の曲輪の火の神ウミチムン、一の曲輪の玉ノミウヂ御嶽だった。肝高の御嶽は、三の曲輪の中央西側にあり、説明板によると、神人という女性祭司が行う年中行事の拝所であった。イメージイラストでは、神人が御嶽の近くにある一部だけ木々が生えている場所を背にトゥヌムトゥという石列に腰かけていた。さらに階段を上っていき二の曲輪に着くと、今帰仁城に続いて勝連城でも火の神ウミチムンが、三方に石垣が積まれ、背には草木が生い茂っている拝所に祀られていた(図6)。またその横にはウシヌジガマという、意味は「身を隠し、凌ぐ自然洞穴」があり、このガマは一の曲輪の玉ノミウヂ御嶽と繋がっていることもわかった。玉ノミウヂ御嶽は一の曲輪の中央部に円柱状に並べられた霊石を御神体として、村の繁栄を願われていた御嶽であった(図7)。勝連城とその周辺は実際かなり栄えていたため、この御嶽は当時とても崇拝されていたと推察できる。

頂上の一の曲輪から見える景色は今帰仁城や座喜味城から見えた景色よりも見晴らしが良く、勝連城が建っている勝連半島からは北と南どちらも海湾が見え、さらに天気が良好だったため沖縄本島南部の知念半島も見ることができた。この景色から当時勝連城がどれだけ栄えていたかは容易に想像ができた。

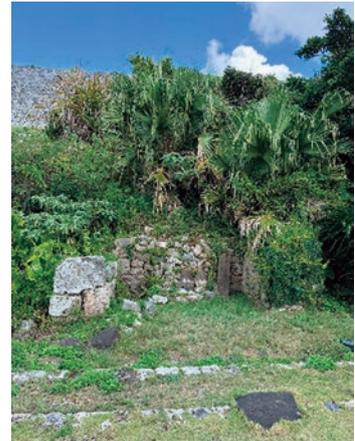


図6 勝連城火の神ウミチムン

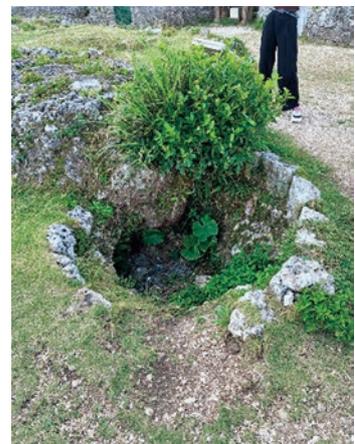


図7 玉ノミウヂ御嶽

3-2. 中城城跡

次は勝連城から少し南に行くとながに訪れることができる琉球王国のグスク及び関連遺産群の一つの中城城跡である。中城城は座喜味城を築いた按司護佐丸によって1440年に築城され、標高が座喜味城より40mほど高い丘陵にあるうえに、東の崖際に城があるため自然に守られた地形となっている。

正門を抜けると南の郭に出るのだが、個人的に中城城で最も特徴的な郭だと思った。南の郭はそれほど大きい郭ではないが、郭内に火の神や御嶽、聖地久高島への拝所の密集度が他の郭と比べて高く、御神体となったと思われる岩や木が石垣に複数囲まれていたためである(図8)。パンフレットによると、南の郭は霊域とされていたため非常に神聖な場所であることがわかっ

た。また、城内には八つの拝所があり、今も拝む人が絶えないと記載されていることから中城城は長い年月が経った今でも人々の心の拠り所であることがわかる。

南の郭を進むと一の郭という中城城で最も広くて高い場所に出る。一の郭で城壁の上から景色を眺望できたが崖際だけに東は太平洋や知念半島を、さらには反対の西側の海まで見ることができた。また、一の郭にも御嶽があり拝所の確認もできた。南の郭のように石垣に囲まれた中に数本の木々があり、この木が御神体として祀られたのではないかと考えられる。

進んで二の郭から階段を下り、北の郭と三の郭に寄り、精巧な形をした裏門を抜けて戻ってきたが、中城城は正門から裏門にかけて上って下る丘だけど山に来た気分になった城だった。



図8 中城城の南の郭

3-3. 浦添城跡

3日目の最後に向かったのは浦添城跡だ。三山時代にそれぞれ統治されていた北部・中部・南部が1429年に尚巴志によって統一されたが、浦添城は13世紀末に造られてから王宮が首里城に移される15世紀前半まで中山の支配者の居城になっていた大規模なグスクである。城内は一部の城壁が見えているだけなのか郭や曲輪によって土地が別けられているようには感じられなく、散策用のルートを生きて見学を行った。

出発地点はグスク時代の集落跡に位置する浦添グスク・ようどれ館で、徒歩で進んでいくと最初に見えてきたのは迫力のある石積みの城壁だった。この城壁が見えた場所は少し広がった空間から見えたのだが、浦添城の周りが緑の少ない市街地であるにもかかわらず、緑豊かな丘陵地の上に城が建っていたため、現代の建築物が中からはあまり見えなかった。

散策ルートを進むと一段低くなった場所のディーグガマという洞穴の前に祀られていた渡嘉敷御嶽があった(図9)。御嶽には香炉が置かれた拝所とその隣にはディーグガマの名前の由来となったデイゴの木と思われる大木が生えていた。今回、引率をくださった琉球大学教育学部の辻雄二先生によると、「御嶽は自然石や樹木に囲まれた自然空間にあり、香炉が置かれている奥の岩や大木を含むその周りが拝まれていた」とのことである。浦添城は当初は調査地の候補に入れていなかったのだが、渡嘉敷御嶽での発見が本演習のテーマ、課題の解決に向けて役立つと判断したため報告書に記載することにした。

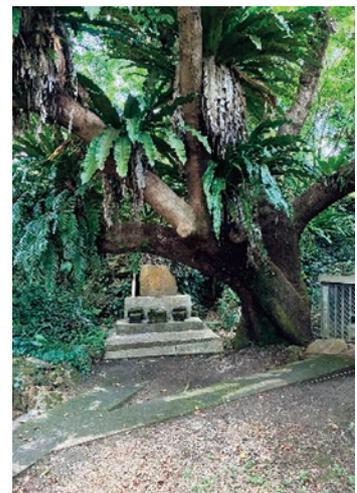


図9 浦添城の渡嘉敷御嶽

4. 第4日目

4-1. 藪薩御嶽

藪薩御嶽は生い茂る森の中にあり、中野の小道を進むと、石と香炉の置かれていた拝所に着いた(図10)。拝所には賽銭された形跡が残っており、現在でも参拝が続いていることがわかる。また、この森には様々な蝶が飛び回っていたのが特徴的だった。世界遺産座喜味城ユンタンザミュージアムに行った際に、展示パネルにて、昔の人は神秘的にみていた蝶を模した蝶型のアクセサリーを身に着けることがあったと記載されていた。そのアクセサリーを身に



図10 藪薩御嶽

着けると、自らも神秘的な力が得られると考えたからである。アクセサリーは、ジュゴンの肩甲骨を加工した蝶型の骨製品であり、県内で十数個ほど出土している。私はこれらの情報を得ていたため、この時初めて当時の人が藪薩御嶽のような神聖な場所にいる蝶をシンボリックな存在としてみていたことにわかった気がした。さらに奥に進むと、少し開けた場所につき、そこからは九御嶽の一つクボ御嶽がある久高島が眺望できた。あの開けた場所が昔からあったのかはわからないが、きっとあの一帯は当時から久高島を拝む場所だったに違いない。

4-2. 玉城城雨粒天次御嶽

玉城城は残念ながら現在通行禁止になっており、奥に進むことができなかった。

4-3. 斎場御嶽

4日目の最後に訪れたのは琉球王国最高の聖地の斎場御嶽である。斎場御嶽は六つの拝所からなり、琉球国王が斎場御嶽内の拝所を廻り国家繁栄や五穀豊穰などを祈願したり、東方の南城(知念・玉城・佐敷・大里)の聖地を巡配する東御回りの参拝地として崇拝されたり、さらには琉球国最高の女性神官の意味を持つ聞得大君が最高神職に就任する儀式である御新下りの場所でもある。現在でも崇拝されている御嶽はほかにもまだまだあるが、歴史を少し垣間見るだけでも斎場御嶽がどれほど神聖かつ重要な場所であるかわかる。

国道331号沿いを曲がり進んでいくと、阿摩美久が天から降りて最初に造ったとされる久高島の遥拝所がある。事前学習の時点で昔から琉球では東から昇る太陽が生の象徴としてみられており、太陽が昇る方向にある久高島とさらに東の海の果てにあるとされるニライ・カナイが崇拝されていたことは把握していたが、久高島遥拝所の説明板には琉球国王も太陽であったと記載されており、これは新たな発見だった。

さらに道に沿って進むと分かれ道が見えてくる。左手に行く

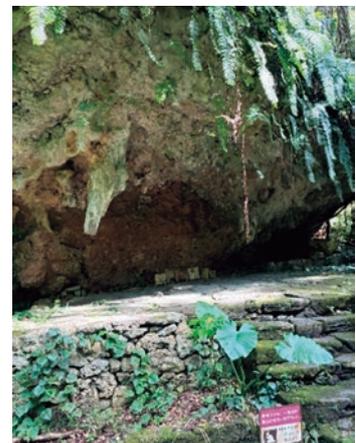


図11 斎場御嶽の寄溝

と鍾乳石できている寄満という王府用語で「台所」を意味する拝所があり、中央には香炉が置かれていた（図 11）。ガイドマップによれば、当時の琉球では交易品が集まる「豊穡の満ち満ちた所」だった解釈されている。

戻って今度は先ほどの分かれ道の反対側に進むと斎場御嶽で観光の目玉となっている三角岩の拝所があった（図 12）。三角岩は巨大な鍾乳石で、その前にはアマダユルアシカヌビーの壺とシキヨダユルアマガヌビーの壺という鍾乳石から垂れてくる「聖なる水」を受けるための壺が置かれている。また、三角岩の奥には三庫理とチョウノハナという香炉が置かれた拝所があるのだが、現在は三角岩の前に柵があり、これ以上奥に進むことができなかった。かわりに三角岩横の岩と岩の隙間から海を覗くことができた。

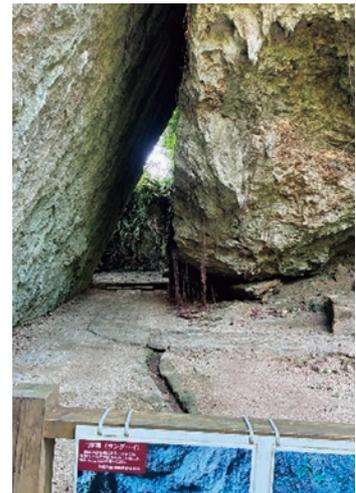


図12 三庫理とチョウノハナ手前の三角岩

5. 第5日目

5-1. 首里城首里森御嶽、園比屋武御嶽石門

5日目はまず首里城公園にある九御嶽の一つ首里森御嶽と、琉球王国のグスク及び関連遺産群の一つ園比屋武御嶽石門に訪れた。同じく首里城にあった真玉城嶽についてだが、現在は現存していないため目にすることはできなかった。

公園西側の守礼門を通過して左手に見えるのは園比屋武御嶽石門（図 13）で、石門が拝殿、その奥の森が本殿にあたる園比屋武御嶽は国王が外出する際に安全を願う祈願所であった。首里城やその周辺の建物が皆朱色の施された見た目をしている中、石門は琉球石灰岩で造られているため色のコントラストが際立ち、ほかとは違う雰囲気を感じた。そして工事中の歓会門、瑞泉門、漏刻門、広福門を順に進んだ先にある下之御庭という場所には目当ての首里森御嶽があった（図 14）。門は園比屋武御嶽石門と似ており、石畳の下之御庭の端に積まれた石で囲んだ中に小さな森があるため、ひときわ目に留まる御嶽であった。また、説明板によると首里森御嶽は首里城内で最も格式高い拝所の一つで、城内には九御嶽の真玉城嶽・首里森御嶽を含む「十嶽」と呼ばれる 10ヶ所の御嶽があったとされている。



図13 園比屋武御嶽石門



図14 首里森御嶽

下之御庭から 2019 年の首里城火災による復元工事エリアを通り公園の一番東の先に進むと、東のアザナという物見台に着く。東は太陽が昇る場所とい

うことから東のアザナとつけられ、高い位置にあり、首里城公園一帯や周辺の街並み、海を一望することができた。琉球が誕生した1429年時には既に存在していた首里城は、沖縄本島南部地域に大きな山がないため城の周り全体を見渡すことが可能である。当時の城下町の住民は自然と王宮と距離が近く、より権威が伝わってきたのではないかと考え、よく考えられた城だなと感心した。

5-2. 知念城跡友利之嶽

最後に訪れたのは知念城跡である。知念城は人が通行できるように道路が整備されていたが城自体は草が伸びきり廃墟のような状態で、海を見下ろすことができる断崖の上にあった(図15)。グスクは二つの郭が隣接しており、説明板によると、駐車場から坂道を下って左側に見えるのがクーグスク(古城)で、私たちが入った二つの門と石垣があった郭がミーグスク(新城)だった。築城時期は不明だが、古城と新城という名前の通りそれぞれの郭が造られた時期は異なる。古城は12～13世紀ごろに、新城は15世紀後半に築城されたと考えられている。また、正門から奥に進むとサンゴ礁まではっきり見えるグラデーションが美しい海と久高島の遥拝所である友利之嶽があるが、見学をした時は草木が生い茂っていて何かがあったようには見えなかった。

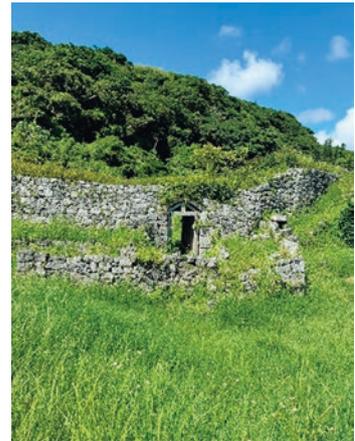


図15 知念城跡

おわりに

以上のように、当初の予定とは多少変わってしまったが課題解決に向けて見学地に足を運んだ。結論から言うと、私が最初に予想していた答えとは異なっていた。疑問点だった首里城の首里森御嶽と真玉城嶽以外の7つの御嶽と座喜味城、中城城、勝連城が沖縄本島の沿岸部に分布している点について、私は御嶽分布の共通点から海がポイントになると考えていた。ニライ・カナイが海の果てにあり、そこから阿摩美久が来訪して各地の御嶽を廻り、恵みを与えるという言い伝えからその御嶽やグスクと海の関係だけに注目してしまっていた。また、この時点で気付くべきだったが、ニライ・カナイは沖縄本島の南東部に位置している久高島よりさらに東にあるとされているため、今帰仁城などの東シナ海寄りに位置する御嶽は東の海＝太平洋を見ることができないと考えられる。実際にテンチジアマチジから見た海は太平洋ではなかった。さらに九御嶽に限らず太平洋が見えない御嶽や渡嘉敷御嶽や首里森御嶽のような内陸にある御嶽もたくさん存在していたことから一つ目の疑問点についてはピックアップしたグスクと御嶽がたまたま沿岸部に分布していたと考えたほうがいだろうという結論に至った。

加えて調査を通し、御嶽の注目すべきポイントは、その場所ではなく姿だということも分かった。見学した御嶽のほとんどが目印となる霊石や樹木を中心に、その周りの草木や森を石垣で囲んでいたのだ。また、中心のものの中には、例として斎場御嶽が顕著に表れている香炉が置かれていたり、訪れた御嶽には共通として沖縄で神聖な植物とされるクバの木がみられたりし

た。勝連城の玉ノミウヂ御嶽の靈石は説明板にしっかりと「靈石が御神体」と記載されているため、ほかの御嶽の中心部にあった石や大木も同様御神体として崇拝されていたと思われる。おそらくグスク時代からの信仰の形態はアニミズムに似ていただろう。沖縄（琉球）には阿摩美久以外にも火の神や祖霊神などの複数の神がおり、阿摩美久のような来訪神もいれば、火の神のように本州の八百万の神々（アニミズム）の性質に似た神もいる。この沖縄独特の多神教的宗教観は、辻先生によると、「沖縄の人々は長く御嶽を信仰の対象としてきたが、琉球王国時代以降はその一部が外来信仰を受容し変化・変容したが、一般の人々の信仰対象であった御嶽は旧来の信仰対象としての姿を少なからず残して今日に至っていると言えます」とのことである。

では御嶽の元々の姿とは何か。それは見学で気付いた御嶽の状態に答えが見えてくるだろう。最初にグスク及び御嶽について簡単に説明したが、御嶽は村や集落の核であると述べた。さらに辻先生は「丘の上や山の中腹の見晴らしの良い場所にある」とも述べられていた。また、辻先生に御嶽の見た目について質問をしたところ、「御嶽の中心となる聖なる空間をイビと呼び、その前にある香炉や石が置かれているところがイビヌメーである」とおっしゃっていた。藪薩御嶽や斎場御嶽、園比屋武御嶽、渡嘉敷御嶽がその例だろう。

つまり、グスク及び御嶽とは時代によって変化もしながら旧来のイビ・イビヌメーの姿を残した沖縄独自の信仰において大切な場所であると私は考えた。

もう一つの疑問点、図1にある12のグスク及び御嶽が本島南部に分布している点については、沖縄の地形が答えを教えてくれた。沖縄本島は北部のほうが標高の高い山地があることに對して、南部は比較的標高の低い丘陵地になっている。まだ電気がなかった時代に基本的に一般の農民が住むと考えた場合、住みやすいのは標高が低く、山が少ない南部地域だろう。住みやすいならば当然人が集まり、のちに御嶽のシンボル（御神体）となるものもたくさん見つかっただろう。また、沖縄県教育委員会によると、総数223件のグスクのうち113件と約半数のグスクが南部に集中している（『ぐすく—グスク分布調査（I）』）。

つまり、この疑問点もまた偶然だったということになる。しかし、九御嶽の一部は明らかに久高島やその向こうにあるニライ・カナイを拝める位置にあるのも事実である。確たる証拠はないが、九御嶽の作者は考えなしに九御嶽を割り当てたとは考えづらい、そう感じざるを得なかった。

約10年ぶりに沖縄に行くことができたのだが、素直にとっても楽しかった。沖縄といっても今回は単なる観光旅行ではなく、事前に自身でテーマを決め、課題のためにフィールドワークをするという本格的な活動は人生で初めてだったので不安はあった。しかし実際にやってみて、こんなにも楽しいものだったのかと感動した。今回のテーマは私が好きなジャンルで学習できたが、より知識や知見を得ようと文献や資料を調べたり、現地の展示室などではより多くの発見を得ようと時間ぎりぎりまで見たり、自分が好きだと思えるものに時間をかけて追求しようとする姿勢ができたことに自分自身驚いてしまった。ただ観光として行っていたら絶対に気が付かなかったことに気づき、人の話や電子機器の画面だけでは絶対に知ることができないこと

も発見することができた。追求するうちにもっと知りたくなることも増えた。沖縄についてすべてを知ることができないにしても、その一片だけでも学べた本演習は私の人生の中でとても貴重な経験だった。

[参考資料]

- ・赤嶺政信『沖縄の神と食の文化』青春出版社、2003年
- ・沖縄県教育委員会文化課編『ぐすくーグスク分布調査（1）』沖縄県文化財調査報告書第53集、沖縄県教育委員会、1983年
- ・上里隆史、山本正昭『沖縄の名城を歩く』吉川弘文館、2019年
- ・組本社『全国の伝承 江戸時代人づくり風土記聞き書きによる知恵シリーズ（47）ふるさとの人と知恵 沖縄』農産漁村文化協会、1993年
- ・新熊野神社「熊野信仰」
<http://imakumanojinja.or.jp/kumanosinkou.html>（2025年10月16日確認）
- ・全国の城好きが集まる日本最大級のお城検索サイト（攻城団）「知念城」
<https://kojodan.jp/castle/343/>（2025年10月30日確認）
- ・世界遺産 文化遺産オンライン「琉球王国のグスク及び関連遺産群」
https://bunka.nii.ac.jp/special_content/hlink9（2025年10月16日確認）
- ・南の島旅「琉球開闢の九御嶽と七御嶽」
<https://www.okinawan-lyrics.com/2021/02/places-of-worship-of-the-beginning-of-ryukyu.html>
（2025年10月16日確認）

沖縄の戦争と観光体験

—学びと娯楽の視点から—

2部日本文化学科 1年 渡部 紗菜

はじめに

今回、文化遺産特別演習を受講するにあたって、私は「戦争を伝える場と観光の両立について」というテーマを設定した。一般的に、観光地には「楽しさ」や「娯楽」のイメージが伴うことが多いが、戦争を伝える場には悲惨さや多くの人々の犠牲を伝える「悲しみ」のイメージを抱く。私は、このように相反する性質を持つ「観光」と「戦争を伝える場」がどのように両立し得るのかに関心を持ち、調べてみたいと考えた。

そこで、現地でガマや平和祈念公園などを実際に訪れ、観光客の様子や展示内容を観察することで、両立の実態を調査することにした。本稿では、現地での体験や観察結果をもとに、沖縄における観光の現状や歴史学習や平和学習の意義について整理し、考察を行う。

1. 沖縄における観光の歴史

神田幸治氏によると、沖縄には古くから「死」に関わる観光形態が存在しているという。戦前においては、亀甲墓と呼ばれる独特の形状を持つ墓が観光資源として注目されていた。これらは南国特有の文化として観光客に珍重された一方で、地元住民にとっては日常生活の一部であったため、観光客との認識の乖離が生じていた。

戦後、米軍統治下の時代には、沖縄南部の戦争遺跡、とりわけ慰霊碑や慰霊塔を訪れる観光客が増加した。当初、沖縄をハワイのようなリゾート観光地として発展させる構想もあったが、最終的には戦争の爪痕を保存し、観光資源として活用する方針に転換された。さらに、観光バスのガイドによる説明内容も時代とともに変遷を遂げた。初期には「戦争で尊い命を捧げた人々の物語」が中心であったが、次第に「平和の尊さを伝える」というメッセージへと変わっていった。このように、沖縄における「死に関係する観光」であるダークツーリズムは、歴史的背景や社会的価値観の変化に伴い、その意義と内容を変えつつ、現在に至っている。

2. 学び・祈りの観光地の現状

城跡や平和祈念公園を訪れた際、私は「学び・祈りの観光地」としての姿を強く感じた。城跡では、すれ違う観光客の多くが外国人であったことに驚かされた。中国や韓国、欧米など多様な国からの観光客が見られ、国際的な関心の高さを実感した。外国人観光客のマナーが問題視されることもあるが、実際には穏やかな様子で静かに見学し、写真撮影も控えめにするなど、宗教的・文化的体験を尊重している姿が印象的であった。一方、平和祈念公園では外国人に加えて修学旅行生が多く見られ、資料館で学習しながら慰霊碑を観察する姿が目立った。これに

対して、ガマは観光客が少なく、静寂に包まれた空間が当時のままの雰囲気の色濃く残っていた。

これらの場所には、楽しさや娯楽を目的とする観光客ではなく、過去を学び、祈りを捧げるために訪れる人々が集まっており、戦争や信仰に関わる観光が国籍を超えて人々を引きつける普遍性を持つことを現地で強く実感した。

2-1. 資料館で学ぶ戦争の記録

ここからは特に戦争と結びつく沖縄平和祈念資料館やひめゆり平和祈念資料館の雰囲気や展示を通して、実際に私が感じたことを整理していく。

展示場に足を踏み入れた時、私は悲惨な戦争の実態よりもまず、施設全体の整備された印象に目を奪われた。沖縄平和祈念資料館やひめゆり平和祈念資料館は建物も新しく、展示空間は明るく清潔で空調も効いており、観覧しやすい環境だった。戦争の悲惨さを伝える場でありながら、そこには「観光地」としての整備が共存しているようであった。当時の惨状を伝えるための場所が現代的で美しく整備されていることには、一見すると矛盾を感じるかもしれない。しかし、こうした整備によって多くの人が訪れ、資料に触れる機会が増えるという意味では、決して否定すべきことではないだろう。私自身、最初はその快適さに違和感を覚えなかった。それは、平和な時代を生きる私が戦争の悲惨さを体感したことがない世代だからなのかもしれない。けれど後から振り返ると、あまりにも整った空間で戦争の現実を見ていたこと自体が私と戦争の間にある隔たりを象徴しているように思えてならなかった。

ひめゆり平和祈念資料館のガラスケースの中に並ぶ手紙や日記、写真には、私とさほど年齢の変わらない少女たちが戦場の只中で必死に国のために尽くしていた記録が残されていた。ある女学生の手紙には、空襲を受けたことに対して「へっちゃら」、「名誉なことです」という内容が書かれていた。その文字を目にしたとき、私は一瞬、何を感じてよいのか分からなかった。生きることよりも国家や名誉のために死ぬことを受け入れてしまう、その思考が同じ人間の中でどう成立したのかが理解できず、恐怖すら覚えた。さらに、映像資料の中で、戦争を生き延びたひめゆり学徒の一人が「生き残ったから幸運でも、死んだから不幸というわけでもない」と語っていた。その言葉は、戦争を知らない私には到底理解できないほど静かで重かった。

ひめゆり学徒たちが過ごした学校生活には、教師へのあだ名、友人との思い出といった共感できる「普通の青春」の断片もあった。展示を見ながら、彼女たちは特別な存在ではなく、自分と同じような普通の学生だったのだとしみじみと感じた。人間にとって死は本来、最も避けたいものであるはずだ。それにもかかわらず、その恐怖が押し殺され、「名誉」として肯定されなければならなかった背景には、戦時下の教育や社会全体の空気があった。展示の中には、当時の教科書や授業風景などもあり、そこでは戦争を肯定するための教育が日常として行われていた。「普通の青春」の中に戦争が入り込み、知らぬ間に日常の価値観まで変えてしまったという現実言葉に言葉を失った。



図1 沖縄平和祈念資料館の外観

結局、資料を通して想像することはできても、実際にその場で生きた人々の苦しみや恐怖を同じように感じ取り、完全に理解することはできなかった。しかし、その「理解しきれない」という距離を自覚することこそ、平和の尊さを考え続ける出発点なのではないかとも考えた。資料や展示を通して歴史的事実に触れることで、単なる知識としてではなく、現実にあった出来事として深く認識することができる。また、目の前の展示や映像は、想像力を働かせて過去の人々の感情や選択を考えるきっかけを与えてくれる。その過程で、自分の中に戦争の現実を「理解しきれない距離感」として捉えながらも、同時に、真摯に向き合い、その意味を自分なりに再構築することができる。この文化遺産特別演習の学びにもまさに言えることだが、「理解できないことを認識し、自分なりに考え、再構築する」という経験そのものに価値があるのではないか。そして、戦争を知らない世代が平和の尊さを学び、次の世代へ伝えていくためには、私が今回感じたような体験が不可欠だと感じた。だからこそ、このような戦争遺跡や資料館は、未来へ記憶を継承する場として存在し続けることが重要である。

2-2. ガマで体感する戦争の現実

チビチリガマやシムクガマ、ヌヌマチガマなどの見学では資料展示とは違い、生々しい当時の雰囲気を感じることができた。ガマはどれも当時のまま残されており、立ち入り禁止箇所には三角コーンや簡単な看板が置かれている程度で、整備は最小限にとどまっていた。天井は低く足元は不安定で、懐中電灯があるにもかかわらず歩くのは困難だった。転べば大怪我をするだろうという恐怖を感じた。



図2 シムクガマに残された当時の破片

さらに、シムクガマ、ヌヌマチガマには当時使用されていたお皿や靴底などの遺物が残されており、生活の痕跡を目にすることで、戦争の現実を五感で体感することができた。ガマはどれも清潔さや安全とは無縁で、快適な資料館とは対照的に、人間の命が極限の状況に置かれた場所であったことを強く感じさせる体験であった。

整備された資料館や公園では、展示や施設の清潔さによって戦争の悲惨さを学びやすい。一方、当時のままのガマは歩くたびに恐怖や不安定さを感じ、暗闇や狭さ、朽ちた器具や靴底の破片が戦場の過酷さを肌で感じた。戦争によって苦しみ、死んでいった人々の恐怖や必死さは言葉だけでは決して実感できない。整備された場所が知識を伝えるなら、そのままの場所は体験として記憶を伝える場である。両者は戦争の記憶を未来へ継承する上で、どちらも不可欠であろう。

3. 娯楽型観光地の現状

これに対して、美ら海水族館や国際通りを訪れた際には、ガマや平和祈念公園とは対照的な「娯楽型の観光」を強く感じた。

美ら海水族館では開館直後にもかかわらず、巨大水槽を前に写真を撮る家族連れやカップルが多く、日本人観光客が圧倒的多数を占めていた。国際通りはとにかく人が多く、歩道を埋め尽くす人波と店からあふれる音や香りに圧倒された。その賑わいは夜遅くまで続き、実際、22

時頃でも多くの人通りを歩き、24時近くまで開いている店も少なくなかった。観光客はオリオンビールTシャツを着て土産物店や飲食店を巡り、旅行ならではの買い物や食事を楽しむ姿が目立った。外国人観光客も見かけたものの、日本人が主体となって沖縄を「リゾート」として満喫する光景が広がっていた。戦前にはほとんど人が訪れない地域であったそうだが、戦後はお土産店が集まる「お土産の聖地」として発展し、現在は約600以上の土産物店が軒を連ねている。特に近年は映えを意識した店舗や写真スポットが増えており、実際に歩いてみてもカラフルなスイーツやSNS映えを狙った装飾が多く、従来の土産物や飲食中心の雰囲気から変化していることが感じられた。観光客の嗜好や時代の流行に応じて街そのものが形を変えていく姿は、観光地が社会の要請によって再生産されていく過程を示しているように思えた。

アメリカンビレッジは、娯楽と歴史が入り混じる独特の観光地であった。米軍基地の返還地を再開発して誕生したこの街はカラフルな建物が立ち並び、ショッピングや食事を楽しむ観光客で賑わっていた。体感では日本人が6割、外国人が4割ほどで、特にアメリカ人らしき外国人が多く見られた。周辺の街並みから一歩足を踏み入れた瞬間空気が一変し、目の前に突然アメリカが現れたかのような異様な雰囲気に驚かされた。看板や建物の色彩、流れる音楽までが一気にアメリカンテイストに変わり、まるで別世界にワープしたような感覚だった。国際通りのように消費を目的とした娯楽空間である一方、米軍統治下の歴史を背景に持つ土地でもあり、看板や街並みには戦後沖縄とアメリカ文化の影響が色濃く残っている。単なるショッピングエリアとしての華やかさの背後に、戦後沖縄がたどった歴史を静かに伝える複雑な側面を感じた。ここには祈りや学びを目的とする雰囲気はなく、同じ「観光」でありながらも楽しさや消費が前面に出た空間が広がっていた。

3-1. アメリカンビレッジから考える戦争の記憶

アメリカンビレッジは娯楽型観光地として多くの人を惹きつけている一方で、もともと米軍基地として使用されていた場所である。このように、沖縄の観光には戦争の記憶と娯楽の要素が重なり合っていることがある。ここでは、事前学習を通じて学んだ戦争の歴史を踏まえ、現地で感じたことを整理する。

アメリカンビレッジを訪れたときまず圧倒されたのは、カラフルな建物や賑やかな店並び、流れる音楽が作り出す街全体の雰囲気であった。歩いているだけで楽しくワクワクする気持ちが湧き上がり、まさに娯楽型の観光地だと感じた。街全体がアメリカの小さな町に迷い込んだかのような異質な空気に包まれ、沖縄本来のほのぼのとした雰囲気とは明らかに異なっていた。

しかし、この華やかさの背後には、米軍基地返還地という歴史的背景があることを思い出すと、単純に娯楽地としての消費だけでは済まない複雑な感情が生まれた。目の前の街の楽しさや異国感は、米軍統治下の歴史とその後の基地返還の影響を色濃く反映しており、娯楽の表層の下に過去の歴史があることを意識せずにはいられなかった。歴史を知らなければただの楽しい観光地で終わってしまうが、背景を理解すると街の異質さと



図3 アメリカンビレッジの街並み

重みを肌で感じることができる。楽しさと歴史の重みが同時に意識され、異質な感覚が心に残った。アメリカンビレッジは、娯楽としての楽しさだけでなく、歴史を知ることによってその体験が深まり、観光客に考える余地を残す場所であると実感した。

この体験から、単なる娯楽型観光でも歴史を知っていれば感情や考え方が深まることを学んだ。背景を理解することで、戦争や占領の影響が現在の風景にどのように残っているのかを意識でき、楽しみながらも学びを得られる。アメリカンビレッジは、華やかさと過去の記憶が同居する、独特で考えさせられる観光地であった。

おわりに

今回の調査を通して、沖縄の観光が「祈り・学び」を目的とする場所と、「娯楽・消費」を楽しむ場所の双方によって成り立っていることを実感した。具体的にはガマや資料館のような歴史や平和に触れる場と、国際通りや美ら海水族館、アメリカンビレッジのような娯楽型の観光地が共存しているのである。

戦争を伝える場が持つ普遍的な価値は確かに大切である一方で、娯楽型の観光地は多くの人を惹きつけ、経済的にも大きな役割を果たしている。楽しさや非日常を求める観光客が娯楽を選ぶのは自然であり、私自身も歩いていて心が躍る感覚を覚えた。しかし、ガマや資料館を巡った経験が無駄だったかという、そうではない。そこで得た学びと気づきは、自分にとってかけがえのない経験になった。単なる旅行では足を運ばない場所だからこそ多くを学ぶことができ、写真映えを目的とした観光だけでは触れられない沖縄の歴史や文化に直接向き合うことで、自分自身の知見が広がり、人生が豊かになったような感覚を得た。

また、娯楽型観光でも歴史を知ることによってその楽しみ方や感じ方が深まったように思う。アメリカンビレッジの華やかさの背後には戦争や占領の歴史があり、それを知ることによって場所に対する理解は大きく変わった。だからこそ、修学旅行や観光ツアーなど計画的な旅では、平和や歴史、祈りについて事前に学び、現地でそれらに触れる観光地を巡る機会が一層重要になるのではないか。楽しさだけでは知り得ない歴史に出会い、平和を考える時間を持つことが、その地を理解するためにも重要である。今回の沖縄での調査を通して、学びと娯楽の双方が揃ってこそ、観光は真に豊かになると強く感じた。

[参考文献]

- ・吉浜忍『沖縄の戦争遺跡〈記憶〉を未来につなげる』吉川弘文館、2017年
- ・神田幸治「沖縄本島における死にまつわる場所を対象とした観光の社会的生産とその変容」『人文地理学会 研究発表要旨』人文地理学会、2015年6月公開、38-39頁。
- ・ひめゆりの塔・ひめゆり平和記念資料館「ひめゆりの塔」
https://www.himeyuri.or.jp/establish/himeyuri_tower/（2025年10月16日確認）
- ・沖縄県平和祈念資料館
<http://www.peace-museum.okinawa.jp/hajimeni/index.html>（2025年10月16日確認）
- ・アメリカンビレッジ AMERICAN VILLAGE 一美浜タウンリゾート
<https://www.okinawa-americanvillage.com>（2025年10月16日確認）

北海道と沖縄戦

1 部英米文化学科 4 年 鎌倉 桃華

はじめに

沖縄戦と北海道—このふたつの関係を聞かれて、すぐに思い浮かぶ人は少ないかもしれない。私もこの研修の事前調査をするまで、2つの関連は知らなかった。今年に入ってから、中学の歴史教科書において都道府県別沖縄戦戦没者のデータを見る機会があった。それは沖縄県を除いたデータで、沖縄県に次いで亡くなった方が多かったのが北海道だと知った。そこからさらに2025年6月現在の最新データを沖縄県のウェブサイトで見ると、平和祈念公園内の平和の礎における北海道出身の刻銘者数は1万808人であり、2位の福岡県（4030人）の2倍以上であることが分かった。これは北海道出身の私にとって見逃せない事実だった。北海道は沖縄から離れている地域であるのになぜかと疑問を持った。教科書には書いておらず、調べると、戦闘が激化する中で北海道出身者が多い第24師団が、満州から沖縄へ派遣されて戦ったのが要因だということが分かった。



図1 平和の礎

「平和の礎」は年齢、性別、国籍、軍人・民間人関係なくすべての犠牲者の名前を刻み、追悼・慰霊する趣旨で建設されていることから、藤波潔「摩文仁」は、本来、沖縄戦を日本全体の戦争体験として記憶するべきだと述べている。しかし、刻銘者の大半が沖縄県出身者であることや、6月23日の「慰霊の日」が沖縄県と結びつきが強いものであることから、「沖縄戦の記憶」が沖縄県だけのローカル・メモリーになってしまっており、「記憶の分断」が生じていると指摘していた。沖縄戦の際、日本軍の牛島満司令官が部下と共に自決したと言われている6月23日は沖縄全戦没者追悼式が行われる。この日は沖縄県では休日となり、正午に合わせて黙とうがささげられる。広島、長崎の原爆投下の日や日本の終戦記念日を知っている人でも、民間人が巻き込まれた沖縄戦の終結の日を答えられる日本人は少ないのではないかと思う。

私は藤波の「記憶の分断」が生じているとの主張に強く共感した。藤波が述べるように平和の礎は「自分たちの故郷」や「自分たちの国」の出来事として記憶することができる空間であるはずだ。しかし実際には、学校の平和学習や修学旅行で沖縄県を訪れても、「沖縄の話」「自分とは遠い出来事」として一時的な、他人事として記憶されてしまうことも多い。2025年6月22日の北海道新聞の戦争の特集記事には、戦争体験者の言葉として「平和は沖縄だけではつukれない」という声載っていた。

私は中学時代、沖縄県渡嘉敷島での研修に参加し、戦争を経験した語り部の方から集団自決の話の直接伺った経験がある。その際に、直接お話を伺ったからこそ、「伝えたい」という気

持ちを持ったが、沖縄県出身でもない私が何かを伝えたり、簡単に「伝えたい」と言ったりして良いのかという後ろめたさがあった。

しかし、このように沖縄戦に北海道が関係していたことを初めて知り、沖縄戦を「自分の地域にも関係のある出来事」として、捉えられるようになった。戦争経験者の高齢化が進む今、記憶の継承は大きな課題となっている。だからこそ、沖縄戦と自分の立場や地域とのつながりを認識して考えてみることは重要だと思う。今回の研修では、自分の出身である北海道と沖縄戦のつながりを発見すると同時に、「自分事」として沖縄戦を捉える視点を深め、どうしたら記憶に残るかを考えることを目的として研修に参加した。

1. 沖縄戦と北海道のつながり

研修では、テーマ設定のきっかけにもなった「北海道出身の犠牲者が多い」という事実を4日目に訪れた平和祈念公園内の平和の礎において自分の目で確認することができた。北海道出身者の刻銘部分は非常に広く、また他の都道府県とは異なり、北海道の区画内でもさらに地域（支庁）に分けて刻まれており、犠牲者の多さを実感した。また、北海道と沖縄戦の関わりとは異なるが、碑の中にはアルファベットで刻まれた海外出身者の名前も多く見られた。平和の礎建設の趣旨にもあるように、国籍、民間人・軍人などを問わず、犠牲者が刻銘されていることを現地で見てより強く実感した。

次に同日に訪れた南北之塔について述べる。この塔は激戦地だった糸満市真栄平にある。塔が建てられた経緯について、ヌヌマチガマを案内してくださった井出佳代子さんからうかがった。現在、南北之塔のそばには「アバタガマ」と呼ばれる自然洞穴があり、戦争中、真栄平の住民が避難に使用していた場所である。戦後、真栄平やこのガマの周辺では多くの遺骨が散乱しており、それを見た地域住民がガマの入り口に遺骨を集めていった。しかし、次第にその場所だけでは収まりきらなくなっていった。当時は収まりきれない遺骨を那覇の中央納骨堂に移す動きもあったが、その土地で亡くなった方を別の土地へ動かすことに反対する真栄平の人々が資金を出し合い、1966年に真栄平に南北之塔が建った。

塔の側面にはアイヌ兵の弟子豊治さん（故人）の「キムンウタリ」という言葉が刻まれている。弟子さんはこの塔が建てられる前年の1965年に、戦争中に親交を持った真栄平出身の仲吉喜行さん（故人）のもとを訪ね、アバタガマに散乱する遺骨を目の当たりにし、このままにしておけないという思いを抱いた。その翌年、物産展のために沖縄を再び訪れた弟子さんは、物産展のために持ち込んだ大量の荷物を置かせてもらったお礼にお金を渡そうとしたが、その



図2 南北之塔



図3 南北之塔側面

お金を自分たちにはではなく南北之塔建設の資金にできないかとの真栄平の人々の声を承諾し、建設費に充てられた。南北之塔の納骨堂部分は真栄平の人々、塔の部分は弟子さんらの資金によって建設された。

南北之塔にはアイヌ兵の遺骨も含まれているということから、この塔が出来てから数回、塔の前でアイヌ伝統儀式イチャルパが行なわれていた。そして今年6月、戦後80年の節目に、数年ぶりに南北之塔の前でアイヌ伝統儀式イチャルパが行われた。数年間儀式が行われなかった理由は、過去にこの塔は「アイヌが作った墓」、「アイヌのもの」という誤った認識が広まったためである。その結果、真栄平と北海道の交流が途絶えてしまっていた。あくまで塔を建てたのは真栄平の人々であり、そこにアイヌ兵の弟子さんが関わっていたという形である。しかし、散乱した遺骨がそのままになっているのは見るに忍びず、出身など関係なく、亡くなられた方が安らかに眠れるように納骨堂を建設したい、という思いは弟子さんも真栄平の住民と同じだったはずである。終戦から80年が経ち、記憶の継承が重要視される今、私はこの南北之塔の歴史を通して単に記憶を継承するだけでなく、事実を正確に伝えることこそが継承の意味を持つと感じた。記憶が風化していく中で、誤った認識が独り歩きしないよう、正しい史実に基づく語り継ぎが求められていると強く思った。

2. どうしたら記憶に残るか

次に、5泊6日の研修の中で特に記憶に残っていることを述べる。

1つ目はチビチリガマとシムクガマでの話である。米軍が本島上陸後、間もない時期にチビチリガマでは母が子の首を切ったり、石油ランプの灯油をかけあったりと、米兵に殺されるくらいなら自ら命を絶つという選択をした人々がいた。一方シムクガマでは、英語を話せるハワイ帰りの日本人がいたことで、米兵と交渉を行い、誰も命を落とすことなくガマを出ることができた。ほんの数キロしか離れていない2つのガマの、どちらに逃げるかというたった一つの選択で生と死が分かれてしまったという事実は衝撃だった。2つのガマでガイドをしてくだ



図4 チビチリガマ

さった知花晶一さんはチビチリガマで生き残った人は、親しい人が亡くなったのに自分は死に切ることができなかつたため、生き残ってしまったという罪悪感を持つ人が多く、戦後長らく自分の経験を語るができなかつたという。「死に切ることができなかつた」という表現からはいかに精神的に追い込まれていたかが分かった。

2つ目はひめゆり平和祈念資料館の展示である。当時、沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校に通っていた少女たちは突然、戦場に駆り出され、狭くて暗いジメジメとしたガマの中で、負傷兵の治療や手伝いをし、いつ爆弾が落ちてくるか分からない中での水汲みや亡くなった方の埋葬など、到底少女たちが担うべきではない仕事を強いられた。資料館には亡くなったひめゆりの少女たちや先生方の写真とともに、どのように亡くなったかが記されている展示

室がある。照明を落とした空間にはガマの中を思わせる暗さや静けさが広がり、「爆撃を受けて即死」、「自決」、「行方不明」などといった記述が並んでいた。展示を前にし、胸が締め付けられる思いがした。

3つ目は第24師団の野戦病院の分院として使われていたヌヌマチガマの見学である。ヘルメットを被り、軍手をして雨で濡れて滑る道を歩きながらガマの奥まで入った。入り口からの光が届かない場所まで行き、持っていた懐中電灯を消すと、想像以上の暗闇だった。そんな環境の中で、戦争中は負傷兵の治療や手術が行われていた。「重傷の兵は見捨てられ、軽傷の兵を治療して再び戦場へ送る」という当時の政策は、国の非情さを示しているように感じた。このガマで治療にあっていた白梅学徒隊の一人が、戦後に「黙っていても平和は来ない。黙っていたらそれを認めているだけだ」と語ったという。私はその言葉をガイドの井出さんから聞き、これからも戦争について学び続け、自分の言葉で伝えていくというように行動していくことが大切だと強く感じた。

以上の3つが、私の中で特に記憶に残った体験である。これらに共通しているのは生と死が隣り合わせの中で、生き延びた人が語った記憶に触れたという点である。また、ガマや地下といった暗闇の空間を実際に歩き、自分の身体で感じ取ることで、知識としてではなく感覚として記憶に刻まれたという点である。これまで、「戦争の悲惨さを語り継ぐことの大切さ」は知識としては理解していたが、実際にその場を訪れ、そこで語られる生き残った人々の言葉に触れた時、「語る人がいたからこそ知ることが出来る」という当たり前の重みを実感した。

おわりに

今回私が掲げたテーマである「自分とゆかりのある場所と沖縄戦との関連を探っていくこと」は、たとえ自分とゆかりのある場所が沖縄と物理的に離れていても、知ることや興味を持つことの第一歩になり、記憶の継承につながっていくと考える。例えば私のように、1つのデータをきっかけに興味を持つことも出来る。また、平和祈念公園には各都道府県の慰霊碑や塔があり、それぞれがどのような経緯で建てられたのか、なぜこの場所に建っているのかを考えることも、記憶をつなぐ一つのきっかけになると感じた。

さらに、ただ聞く・見るだけでなく、体験を通して自らの身体で感じ取ったことは記憶に深く残るということが分かった。生きた人が語り、私たちがその言葉を聞くことで、戦争の記憶は今も息づいている。語り手が少なくなっていくこれからの時代においては、聞いた者が次の語り手となることが求められるのではないかと感じた。

私は来年の3月に大学を卒業し、4月からは旅行会社に就職する。そして修学旅行など学校の旅行に関わっていく予定である。この研修で得た気づきや学びを糧にし、私自身の言葉で正しく伝えていくことを大切にしていきたい。



図5 伊原第三外科壕の跡地に建てられたひめゆりの塔

[参考文献]

- ・ 藤波潔「摩文仁—平和祈念資料館、平和の礎、林立する慰霊塔」、沖縄国際大学・宜野湾の会『大学的沖縄ガイド—こだわりの歩き方』昭和堂、2016年、57-69頁
- ・ 橋本進『南北の塔—アイヌ兵士と沖縄戦の物語』草土文化、1981年
- ・ 「若者と紡ぐ記者がたどる戦争 特別編」『北海道新聞』2025年6月22日朝刊
- ・ 「糸満で追悼のイチャルパ 道内からアイヌ民族6人」『北海道新聞』2025年6月24日朝刊
- ・ 沖縄県「平和の礎刻銘者数一覧（令和7（2025）年6月23日現在）」
<https://www.pref.okinawa.jp/heiwakichi/jinken/1008269/1008287/1008288/1008292.html>（2025年10月16日最終確認）

令和7年度 文化遺産特別演習報告書 第5号

発行日 令和8(2026)年3月1日

発行 北海学園大学人文学部

印刷 株式会社アイワード

文化を学ぶ 世界と繋がる



北海学園大学人文学部

日本文化学科(1部・2部) / 英米文化学科(1部・2部)

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL.011-841-1161(代表) FAX.011-824-7729

URL <https://human.hgu.jp/>